別紙様式３

平成３０年度　第１回　不破高等学校活性化協議会　議事要旨

日　時	平成３０年５月２３日（水）　１３：３０～１５：００
場　所	不破高等学校　ガイダンス室
出席者 （敬称略、50 音順）	（委員） 高木　淳一　　不破高等学校ＰＴＡ会長 髙橋　了三　　垂井町商工会事務局長 竹内　治彦　　岐阜経済大学教授 中川　敏之　　関ケ原町教育委員会教育長 中川　満也　　垂井町長（代理：永澤幸男 副町長） 西川　一明　　宮代地区まちづくり協議会長 西脇　康世　　関ケ原町長（代理：柴田安寛 副町長） 丹羽　豊次　　不破高等学校同窓会長 林田　力　　垂井町立北中学校長 原川　拓雄　　垂井町立不破中学校長 藤墳　守　　岐阜県議会議員 山田　直人　　垂井町立宮代小学校長 和田　満　　垂井町教育委員会教育長 （学校側） 内木　晃　　校長 増田　泰志　　教頭 川瀬　英樹　　教務主任 臼井　澄人　　進路指導主事 下野　恵理子　　特別活動部長 （県教育委員会） 秋場　毅　　教育総務課課長補佐兼係長
議事概要	○特色ある学校づくりのための取組について ・学校のパンフレットを刷新するということだが、どのくらいの中学生がパンフレットを見て進学先を決めるものなのか。 ・中学生が進路を決定するに当たって、今までの先輩（在校生）からの情報が大きい。それが卒業生から直接中学生へ伝わるとその影響は大きい。 ・本校のこれまでの負のイメージはあまりないのではないか。中学校にいてそれは感じない。私立高校が入学の基準を持ち始め、私立高校に入学できない生徒を本校が受け入れてくださることはとても頭が下がる。昨年も本校の教員が中学校へ出向き、個別に熱心に高校生活を説明してくださったこともあり、とてもありがたかった。経済面での選択肢で葛藤している生徒もいる。ゆとり（9 時始業、小中と同じ長期休業期間など）も魅力である。 ・今は負のイメージがなくなってきているのではないか。入学者数の落ち着きがそれを表している。ある意味、地域からは正当な評価を得ているのではないか。少人数

	授業や科目選択制に魅力を感じていると思う。外見的なパンフレットの刷新がさらなる志望者増加を生むとは思わない。中身をどう発信するかである。 ・不破郡の中学校の出身者の割合が２８％は少ない。今後に期待したい。 ・夏休み後半に進学先を決定するというアンケート結果があるように、この後の２、３カ月が勝負どころ。一層の熱心なＰＲを期待したい。 ・スクールバスも毎日平均３０人前後の利用があることは喜ばしい。 ・本校が行っている様々な取組に驚いたが、それが逆に特色となる。外へのＰＲが大切。例えば、地域活動で小さな子供たちの参加するイベントでＰＲできると、長い目を見て成果につながると思う。 ・地元宮代地区の長寿会での吹奏楽部の演奏は大変評判がいい。 ・地域の活動で高校生の一生懸命やる姿が、地域の大人たちに好印象を与えている。 ・今年２月に実施した「来て、見て、知って。垂井町の学校教育発表会」において、本校自然科学部の発表が高評価を受けていた。また、中央公民館を通る本校生徒がよい挨拶をしてくれる。 ・ＰＲについて、この２年間を振り返ってみても、本校が努力をしているのはよくわかった。この協議会を媒体にしてその取組を発信できている。３年過ぎるとそれがどうなるかが不安。入学者選抜における部活動の県外募集は０名だった。県外ではどういう認識でとらえられているか。今後どうしていくのかを県教育委員会中心に考えていく必要がある。保護者や地域にどんな努力をしているかをＰＲしていくことが大切である。 ・私も１０年前の本校をよく知っている。大きく変わってきているかとも思う。自営で頑張っている卒業生もたくさんいる。商工会の立場から、地産地消の一端で何か高校とコラボで商品開発やイベントでのブースを与えたＰＲもいいと思う。メディア的にも乗っかるところが大きい。起業家育成という観点からそういうものも活用してほしい。インターンシップも然りである。 ・子どもが小学校５年生の時にスポーツチャンバラを教えてもらった影響で、中学生になった今も部活動ではないがスポーツチャンバラを続けている。これも素晴らしいＰＲである。